

中学校 高等学校 教育研究

高等学校進学時における生徒の学校への適応感等に関する調査研究

教育相談課 研究員 宮田 陽

要 旨

中学校3年生、高等学校1年生の学校適応感とストレスコーピングを測定し、学校規模（高等学校1年生については出身中学校の規模）の違いによって生徒の適応感やコーピングに差があるのかを検討した。その結果、中学校3年生では学校への適応感尺度の3因子（居心地の良さの感覚、課題・目的の存在、被信頼・受容感）、コーピング尺度の2因子（問題焦点型、情動焦点型）で、学年2～3クラスの学校の生徒が有意に高く、高等学校1年生では出身中学校の規模の違いによる差は見られなかった。

キーワード：中学校3年生 高等学校1年生 適応感 コーピング 学校規模

I 主題設定の理由

文部科学省（2017）の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、平成28年度の高校における中途退学者は47,249人であり、その内のおよそ33.5%にあたる15,830人が1年生である。この1年生の中途退学の事由として、学校生活・学業不適応が最も多くなっている。また、高校における不登校生徒数は48,565人となっており、その内のおよそ23.5%にあたる11,405人が1年生である。こうした1年生の中途退学者数や不登校者数は、単位制を除く他の学年の中途退学者数、不登校者数と比較して、最も多い数値となっている。

全校生徒30名程度である前任校の実態としても、中学校生活には適応していたように見られた生徒が、高等学校への進学をきっかけに学校生活にうまくなじめず、結果として中途退学してしまったというケースがしばしばあり、幼少期から変わらぬ人間関係のまま中学校までを過ごしてきた生徒が、高等学校進学という環境変化に対応できるのかということが懸念されていた。

こうした高等学校進学時の生徒への支援については、高等学校入学初期段階でのグループアプローチによって、友人関係の構築やホームルームへの適応を支援したり、ストレスマネジメント等で環境変化によるストレスの緩和や対処法を学んだりする機会を設けることの必要性があげられている。しかし、「生徒がかなり分散するので追跡調査が困難であること」（永作・新井，2005）等により、中学校から高等学校への学校移行に関する研究は、非常に少ないということが述べられている。

学校適応に関する先行研究では、適応の要因として、「友人との関係」や「教師との関係」といった人間関係や、「学業」が共通して挙げられており、学校適応に影響を与えているとされてきた。一方で、これらの要因は研究者側で設定されており、当該の学校環境の特徴等が考慮されていないこと、「学校への適応感の規定因は学校ごとに異なり、学校の特徴を反映する」ということ（大久保，2005）が指摘されており、適応に関する研究をする上で、各学校の特徴を捉えることの必要性が述べられている。実際に、私自身の教職経験からも、生徒数が750名近い規模の中学校の生徒は、人間関係の変化への対応力やストレス耐性があるように感じられたり、前任校の生徒の方が素直で純粋のように感じられたりと、異なる学校規模の生徒において、漠然とした違いを感じるがあった。

以上のことから、本研究では、学校規模の違いに着目し、高等学校進学に関わる中学校3年生と高等学校1年生の学校適応感や、ストレスコーピングを調査するとともに、学校規模（高校生については出身中学校の規模）の違いによって学校適応感やストレスコーピングに差があるのかを検討することとした。なお、本研究におけるストレスコーピングとは、ストレスを軽減したり解消するための対処行動と捉えることとする。これにより、学校規模の違いによる生徒の傾向をつかむことができれば、それに応じた中学校段階での指導を工夫する糸口を得られるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究目的

高等学校進学時の生徒の学校への適応感等を調査し、出身中学校の規模の違いから比較・分析することで、その特徴を明らかにする。

III 研究の実際とその考察

1 学校適応感について

従来の学校適応感の因子と考えられてきた「友人との関係」「教師との関係」「学業」などは、学校への適応感そのものというよりも、適応感を規定する学校生活の要因として捉えなおすことができる（大久保・青柳，2004）。こうした観点から大久保（2005）は、学校生活の要因が適応感に与える影響の構造は学校ごとに異なるため、適応本来の意味である個人と環境の関係の視点から学校適応感尺度を作成する必要性を述べており、適応感の因子として「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」「劣等感の無さ」を抽出している。本研究は、これらの4因子を適応の要因として調査を進めていくものとする。

2 調査内容について

新井，古河，浅川（2009）によると、学校適応感を測定することは、生徒全体の傾向をつかむことができるとともに、生徒個々のニーズに応じた支援を進める契機になるとし、その支援の一つに、進学時の適応に向けたストレスマネジメントの必要性が述べられている。実際に自身の教職経験からも、環境変化によるストレス耐性に違いがあるように感じたことから、本研究では学校適応感と、ストレスコーピングを測定し、学校規模の違いによってこれらに差があるのか、また、学校適応感とストレスコーピングにはどのような関係性があるのかを比較・分析することとした。

3 質問紙の構成について

(1) フェイスシート（属性）

ア 中学校3年生については、性別、兄弟構成、中学校の規模、部活動の加入状況、高等学校卒業後の進路志望状況を選択性とした。なお、中学校の規模については、学年1クラスの学校を小規模校、学年2～3クラスの学校を中規模校、学年4クラス以上の学校を大規模校とした。

イ 高等学校1年生については、性別、兄弟構成、出身中学校の規模、部活動の加入状況、高等学校卒業後の進路志望状況を選択性とした。なお、出身中学校の規模については、アでの中学校の規模分類と同様とした。

(2) 学校への適応感尺度

学校への適応感尺度は、大久保（2005）によって作成された、中学生、高校生の学校への適応感を測定するための尺度である。学校・学級に居心地の良さを感じているという「居心地の良さの感覚」（第1因子）、学校や自己に対する課題や目的があるという「課題・目的の存在」（第2因子）、学校や学級の人間関係の中で、信頼されている、受け入れられていると感じているという「被信頼・受容感」（第3因子）、自己が劣等感を感じていないという「劣等感の無さ」（第4因子）の4因子30項目から構成されており、各項目内容に対して、1. 全くあてはまらない 2. あまりあてはまらない 3. どちらともいえない 4. ややあてはまる 5. 非常によくあてはまる の5件法で回答を求めるものになっている。

(3) コーピング尺度

コーピング尺度は、尾関（1993）によって作成されたコーピングを測定する尺度である。何かストレスを感じたときにその問題そのものを解決しようとする「問題焦点型」（第1因子）、ストレスに対して生じた感情をコントロールして抑制しようと努める「情動焦点型」（第2因子）、ストレスそのものから回避し逃がれようとする「回避・逃避型」（第3因子）の3因子14項目から構成されており、各項目内容に対して、0. 全くしない 1. たまにする 2. 時々する 3. いつもする の4件法で回答を求めるものになっている。

4 調査の実施について

(1) 調査方法

X地区19校の中学校3年生1,081名，X地区9校の高等学校1年生778名を対象に質問紙を配付し，調査を行った。回収数は，中学校3年生1,025名（回収率94.8%），高等学校1年生761名（回収率97.8%）であった。

(2) 実施時期

2018年6月下旬から7月上旬に実施した。

5 調査結果について

(1) 中学校3年生の調査結果

ア 学校への適応感尺度について

各因子の平均値（最大値5，以下同様）は，「居心地の良さの感覚」は小規模校が3.72，中規模校が3.98，大規模校が3.80，「課題・目的の存在」は小規模校が3.86，中規模校が4.08，大規模校が3.84，「被信頼・受容感」は小規模校が3.13，中規模校が3.34，大規模校が3.14，「劣等感の無さ」は小規模校が3.30，中規模校が3.43，大規模校が3.36であった（図1）。この結果に対して，学校規模による差を検討するために，学校への適応感尺度の各下位尺度得点を従属変数とし，学校規模（小規模，中規模，大規模）を独立変数とする1要因の分散分析を行った。その結果，「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」の3因子において，0.1%水準で有意な差があることが明らかとなった（表1）。「劣等感の無さ」因子では有意差は見られなかった。

チューキーのHSD法で多重比較を行った結果，「居心地の良さの感覚」では，中規模校の生徒の平均値が，小規模校の生徒の平均値より0.1%水準で有意に高く，大規模校の生徒の平均値より5%水準で有意に高いことが明らかとなった（表2）。「課題・目的の存在」では，中規模校の生徒の平均値が，小規模校，大規模校の生徒の平均値より0.1%水準で有意に高いことが明らかとなった（表3）。「被信頼・受容感」では，中規模校の生徒の平均値が，小規模校の生徒の平均値より1%水準で有意に高いことが明らかとなった（表4）。

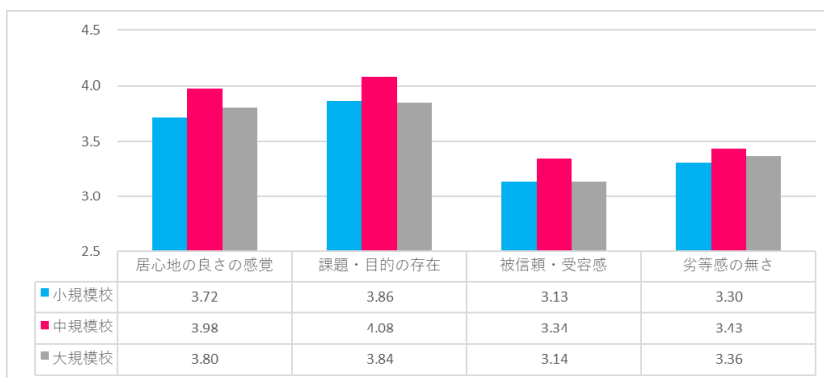


図1 学校への適応感尺度の平均値

表1 学校への適応感尺度の1要因の分散分析の結果

	小規模校 (N=225)		中規模校 (N=587)		大規模校 (N=213)		F値
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
居心地の良さの感覚	3.72	0.85	3.98	0.79	3.80	0.91	9.16***
課題・目的の存在	3.86	0.80	4.08	0.73	3.84	0.80	11.23***
被信頼・受容感	3.13	0.79	3.34	0.79	3.14	0.78	8.21***
劣等感の無さ	3.30	0.75	3.43	0.78	3.36	0.77	2.38

***p<.001

表2 「居心地の良さの感覚」の多重比較の結果

学校規模 (I)	学校規模 (J)	平均値の差 (I-J)
小規模	中規模	-0.26***
	大規模	-0.08
中規模	小規模	0.26***
	大規模	0.18*
大規模	小規模	0.08
	中規模	-0.18*

***p<.001 *p<.05

表3 「課題・目的の存在」の多重比較の結果

学校規模 (I)	学校規模 (J)	平均値の差 (I-J)
小規模	中規模	-0.22***
	大規模	0.02
中規模	小規模	0.22***
	大規模	0.24***
大規模	小規模	-0.02
	中規模	-0.24***

***p<.001

表4 「被信頼・受容感」の多重比較の結果

学校規模 (I)	学校規模 (J)	平均値の差 (I-J)
小規模	中規模	-0.21**
	大規模	-0.01
中規模	小規模	0.21**
	大規模	0.20
大規模	小規模	0.01
	中規模	-0.21

**p<.01

イ コーピング尺度について

各因子の平均値（最大値3，以下同様）は，「問題焦点型」は小規模校が1.42，中規模校が1.55，大規模校が1.39，「情動焦点型」は小規模校が1.36，中規模校が1.58，大規模校が1.42，「回避・逃避型」は小規模校が1.45，中規模校が1.51，大規模校が1.54であった（図2）。この結果に対して，学校規模による差を検討するために，コーピング尺度の各下位尺度得点を従属変数とし，学校規模（小規模，中規模，大規模）を独立変数とする1要因の分散分析を行った。その結果，「情動焦点型」因子では，1%水準で有意な差があり，「問題焦点型」因子では，5%水準で有意な差があることが明らかとなった（表5）。「回避・逃避型」因子では有意差は見られなかった。

テューキーのHSD法で多重比較を行った結果，「情動焦点型」では，中規模校の生徒の平均値が，小規模校の生徒の平均値より1%水準で有意に高いことが明らかとなった（表6）。「問題焦点型」では，中規模校の生徒の平均値が，大規模校の生徒の平均値より5%水準で高いことが明らかとなった（表7）。

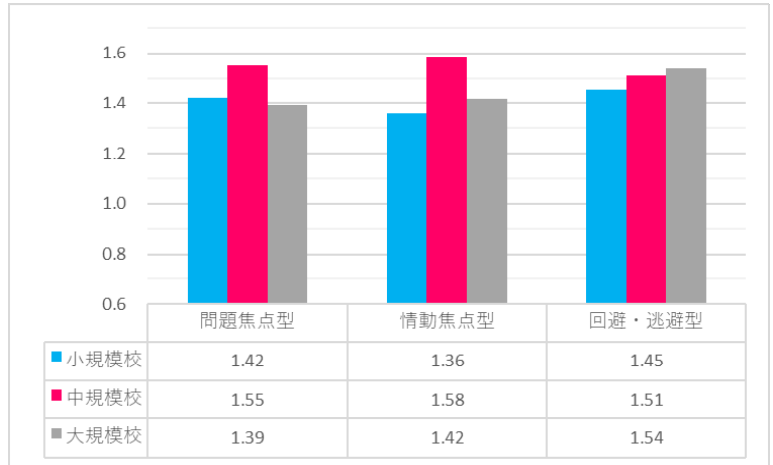


図2 コーピング尺度の平均値

表5 コーピング尺度の1要因の分散分析の結果

	小規模校 (N=225)		中規模校 (N=587)		大規模校 (N=213)		F値
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
問題焦点型	1.42	0.76	1.55	0.78	1.39	0.77	4.21*
情動焦点型	1.36	0.87	1.58	0.87	1.42	0.82	6.46**
回避・逃避型	1.45	0.70	1.51	0.66	1.54	0.67	0.90

**p<.01 *p<.05

表6 「情動焦点型」の多重比較の結果

学校規模 (I)	学校規模 (J)	平均値の差 (I-J)
小規模	中規模	-0.22**
	大規模	-0.06
中規模	小規模	0.22**
	大規模	0.16
大規模	小規模	0.06
	中規模	-0.16

**p<.01

表7 「問題焦点型」の多重比較の結果

学校規模 (I)	学校規模 (J)	平均値の差 (I-J)
小規模	中規模	-0.13
	大規模	0.03
中規模	小規模	0.13
	大規模	0.16*
大規模	小規模	-0.03
	中規模	-0.16*

*p<.05

ウ 学校への適応感尺度とコーピング尺度のピアソンの相関分析

ア，イで測定した学校への適応感尺度とコーピング尺度の関連性を検討するために，ピアソンの積率相関係数を算出した（表8）。その結果，全体では，学校への適応感尺度の「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」に対して，コーピング尺度の「問題焦点型」「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。

小規模校では，「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」に対して，「問題

焦点型」「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。「劣等感の無さ」に対しては、「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。

中規模校では、「居心地の良さの感覚」に対して、「問題焦点型」「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。「課題・目的の存在」に対して、「情動焦点型」において1%水準で有意な正の相関が認められ、「問題焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。「被信頼・受容感」に対して、「問題焦点型」「情動焦点型」において1%水準で低い正の相関が認められた。

表8 学校への適応感尺度とコーピング尺度の相関係数

N=1025(小規模校N=225 中規模校N=587 大規模校N=213)

		問題焦点型	情動焦点型	回避・逃避型
居心地の良さの感覚	全体	.290**	.361**	.093**
	小規模校	.354**	.395**	.088
	中規模校	.284**	.379**	.110*
	大規模校	.208**	.241**	.051
課題・目的の存在	全体	.307**	.399**	.074*
	小規模校	.390**	.397**	-.003
	中規模校	.312**	.426**	.117**
	大規模校	.161*	.281**	.052
被信頼・受容感	全体	.327**	.380**	.119**
	小規模校	.351**	.371**	.041
	中規模校	.336**	.394**	.148**
	大規模校	.243**	.306**	.133
劣等感の無さ	全体	.029	.161**	-.106**
	小規模校	.125	.253**	-.104
	中規模校	.039	.189**	-.113**
	大規模校	-.126	-.065	-.096

**p<.01 *p<.05

大規模校では、「居心地の良さの感覚」に対して、「問題焦点型」「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。「課題・目的の存在」に対して、「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。「被信頼・受容感」に対して、「問題焦点型」「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。

(2) 高等学校1年生の調査結果

ア 学校への適応感尺度について

学校への適応感尺度における各因子の平均値(最大値5, 以下同様)は、「居心地の良さの感覚」は小規模校出身が3.98, 中規模校出身が3.90, 大規模校出身が4.03, 「課題・目的の存在」は小規模校出身が4.13, 中規模校出身が4.08, 大規模校出身が4.13, 「被信頼・受容感」は小規模校出身が3.23, 中規模校出身が3.20, 大規模校出身が3.26, 「劣等感の無さ」は小規模校出身が3.60, 中規模校出身が3.49, 大規模校出身が3.54であった(図3)。

この結果に対して、学校規模による差を検討するために、学校への適応感尺度の各下位尺度得点を従属変数とし、学校規模(小規模, 中規模, 大規模)を独立変数とする1要因の分散分析を行ったが、どの因子においても有意な差は見られなかった(表9)。

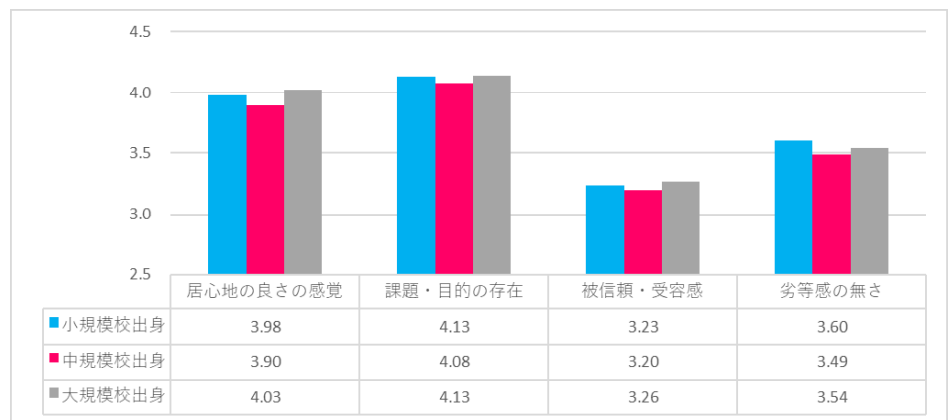


図3 学校への適応感尺度の平均値

表9 学校への適応感尺度の1要因の分散分析の結果

	小規模校出身 (N=125)		中規模校出身 (N=313)		大規模校出身 (N=323)		F値
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
居心地の良さの感覚	3.98	0.76	3.90	0.75	4.03	0.76	2.16
課題・目的の存在	4.13	0.71	4.08	0.69	4.13	0.71	0.58
被信頼・受容感	3.23	0.74	3.20	0.73	3.26	0.71	0.70
劣等感の無さ	3.60	0.78	3.49	0.75	3.54	0.81	0.97

イ コーピング尺度について

コーピング尺度における各因子の平均値（最大値3，以下同様）は、「問題焦点型」は小規模校出身が1.60，中規模校出身が1.53，大規模校出身が1.54，「情動焦点型」は小規模校出身が1.69，中規模校出身が1.59，大規模校出身が1.58，「回避・逃避型」は小規模校出身が1.48，中規模校出身が1.57，大規模校出身が1.59であった（図4）。この結果に対して，学校規模による差を検討するために，コーピング尺度の各下位尺度得点を従属変数とし，学校規模（小規模，中規模，大規模）を独立変数とする1要因の分散分析を行ったが，どの因子においても有意差は見られなかった（表10）。

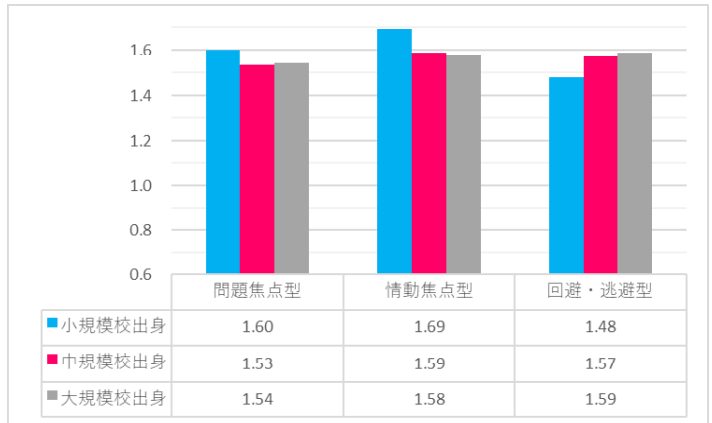


図4 コーピング尺度の平均値

表10 コーピング尺度の1要因の分散分析の結果

	小規模校出身 (N=125)		中規模校出身 (N=313)		大規模校出身 (N=323)		F値
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
問題焦点型	1.60	0.72	1.53	0.77	1.54	0.72	0.35
情動焦点型	1.69	0.80	1.59	0.85	1.57	0.89	0.82
回避・逃避型	1.48	0.55	1.57	0.68	1.59	0.66	1.23

ウ 学校への適応感尺度とコーピング尺度のピアソンの相関分析

ア，イで測定した学校への適応感尺度とコーピング尺度の関連性を検討するために，ピアソンの積率相関係数を算出した（表11）。その結果，全体では，学校への適応感尺度の「居心地の良さの感覚」に対して，コーピング尺度の「問題焦点型」「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。「課題・目的の存在」に対して，「情動焦点型」において1%水準で有意な正の相関が認められ，「問題焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。「被信頼・受容感」に対して，「情動焦点型」において1%水準で有意な正の相関が認められ，「問題焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。

小規模校出身では，「居心地の良さの感覚」に対して，「情動焦点型」において1%水準で有意な正の相関が認められ，「問題焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。「課題・目的の存在」に対して，「問題焦点型」「情動焦点型」において1%水準で有意な正の相関が認められた。「被信頼・受容感」に対して，「問題焦点型」「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。「劣等感の無さ」に対して，「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。

中規模校出身では，「居心地の良さの感覚」に対して，「問題焦点型」「情動焦点型」において1%

水準で有意な低い正の相関が認められた。「課題・目的の存在」に対して、「問題焦点型」「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。「被信頼・受容感」に対して、「問題焦点型」「情動焦点型」において1%水準で低い正の相関が認められた。

大規模校出身では、「居心地の良さの感覚」に対して、「情動焦点型」において1%水準で有意な低い正の相関が認められた。「課題・目的の存在」に対して、「情動焦点型」において1%水準で有意な正の相関が認められた。「被信頼・受容感」に対して、「情動焦点型」において1%水準で有意な正の相関が認められ、「問題焦点型」において1%水準で低い正の相関が認められた。

表 1 1 学校への適応感尺度とコーピング尺度の相関係数

N=761(小規模校出身N=125 中規模校出身N=313 大規模校出身N=323)

		問題焦点型	情動焦点型	回避・逃避型
居心地の良さの感覚	全 体	.245**	.378**	.075*
	小規模校出身	.306**	.412**	.115
	中規模校出身	.317**	.362**	.012
	大規模校出身	.157**	.386**	.124*
課題・目的の存在	全 体	.236**	.436**	.111**
	小規模校出身	.413**	.536**	.037
	中規模校出身	.281**	.385**	.064
	大規模校出身	.131*	.448**	.182**
被信頼・受容感	全 体	.268**	.413**	.123**
	小規模校出身	.297**	.399**	.054
	中規模校出身	.308**	.384**	.131*
	大規模校出身	.219**	.448**	.139*
劣等感の無さ	全 体	.009	.181**	-.074*
	小規模校出身	.122	.224*	.056
	中規模校出身	.067	.156**	-.188**
	大規模校出身	-.087	.185**	-.006

**p<.01 *p<.05

6 考察

(1) 中学校3年生に対する支援について

以上の調査結果より、学校規模の違いによって、学校適応感やストレスコーピングに有意な差があることが明らかとなった。また、学校への適応感尺度とコーピング尺度の因子間の相関関係にも有意な差が認められた。このことから、学校規模の違いに応じて、より効果的な支援ができると考えられる。

小規模校における支援について考えたい。学校への適応感尺度の「居心地の良さの感覚」において、コーピング尺度の「問題焦点型」「情動焦点型」との間に相関関係が認められたことから、学校における個別面談等でストレスの原因や解決の方法を考えさせたり、学級活動等の時間を利用してストレスマネジメントやアンガーマネジメント等を実施し、ストレスから生じる感情の制御について学習させることで、学校における居心地の良さを感じて学校生活が良好なものとなると考えられる。また、「課題・目的の存在」において、「問題焦点型」「情動焦点型」との間に相関関係が認められたことから、上記のような活動が、生徒自身に課題意識や目的意識をもたせることに対して有効であると考えられる。キャリア教育や進路指導を充実させることも、学校への適応感を高めるとともに、ストレスに関して、ストレス（原因）への対処や怒り・不安などの感情を制御することにもつながると考えられる。「被信頼・受容感」においても、「問題焦点型」「情動焦点型」との間に相関関係が認められたことから、ストレスの原因やそれによって起こる感情への対処法を学習させることで、受容感が高まり、学校適応感も高まっていくと考えられる。また、学校において、生徒が他の生徒や教師によって受容されているという感覚を高めるための活動が、生徒自身のストレスへの耐性を高め、うまくストレスに対処できるようになることにつながっていくということも示唆された。「劣等感の無さ」においては、「情動焦点型」との間に相関関係が認められたことから、ストレスによって生じた感情をどのようにして解消させていくのかを学習することが、生徒の劣等感を軽減して、学校への適応感を高めていくということが示唆された。

中規模校への支援について、因子間の相関関係は小規模校とほぼ同様であったため、小規模校と同様の活動が効果的であると考えられる。ただし、「課題・目的の存在」と「情動焦点型」との相関関係が他の規模の因子間のものよりも強かったため、学校で、生徒の自己の在り方・生き方を考えるキャリア教育や生徒に対するストレスマネジメント、アンガーマネジメントを学習して自己実現を目指すことによって、生徒の学校への適応感を高めて、ストレスに対してうまく対応できるようになることが示唆された。

大規模校への支援については、「居心地の良さの感覚」「被信頼・受容感」と「問題焦点型」「情動焦点型」の相関関係は、他の学校規模のものと同様であったため、小規模校、中規模校と同様の活動が有効

であろう。一方で、「課題・目的の存在」においては「情動焦点型」との相関関係しか認められなかったため、学校での進路指導やキャリア教育の充実を図ることと、ストレスによって生じる感情へのストレスマネジメントやアンガーマネジメントを充実させ、生徒の個の伸長を図ることが、生徒の学校への適応感を高め、ストレス対処能力を獲得していく基盤となっていくと考えられる。

(2) 高等学校 1 年生に対する支援について

出身中学校の規模の違いによって、学校適応感やストレスコーピングに有意な差は見られなかったが、学校への適応感尺度とコーピング尺度の因子間の相関関係には有意な差が認められた。

コーピング尺度の「問題焦点型」因子においては、「居心地の良さの感覚」に対して小規模中学校出身の生徒と中規模中学校出身の生徒に相関関係が認められたことから、学校における個別面談等でストレスの原因や解決の方法を生徒と一緒に考えるといった活動によって、「居心地の良さの感覚」の向上に正の影響を与え、学校への適応感を高めることができると考えられる。「課題・目的の存在」に対しては、小規模校出身の生徒と中規模校出身の生徒に相関関係が認められたことから、上記の、ストレスの原因に対する対処の仕方を学ばせることが生徒個々の課題意識や目的意識に正の影響を与え、学校への適応感を高めていくと推察される。また、反対に、学校においてホームルーム活動や総合的な学習（探究）の時間等を活用し、キャリア教育や進路指導を充実させ、生徒の課題意識や目的意識を高めることによって、個々のストレスの原因への対処に対して正の影響を与え、結果として個々の生徒のストレスへの対処能力が高まっていくことが推察される。さらに、中規模校出身の生徒に比べ、小規模校出身の生徒の相関関係が強いため、キャリア教育や進路指導の充実を図ることは、結果として生徒個々のストレスへの対処能力向上に寄与するものと考えられる。「被信頼・受容感」に対しては、どの学校規模出身の生徒にも同程度の相関関係が認められたことから、ストレスの原因への対処を学ぶことと、他の生徒や教師から受容されているという感覚を高めることが互いに正の影響を及ぼすということが推察される。

「情動焦点型」因子においては、「居心地の良さの感覚」に対してどの学校規模出身の生徒にも相関関係が認められたことから、ストレスマネジメントやアンガーマネジメント等を学習させ、生徒個々がストレスによって生じた感情の制御を学ぶ機会を設けるといった活動が、学校における居心地の良さの感覚に正の影響を与え、学校への適応感が高まっていくと考えられる。「課題・目的の存在」に対しても、どの学校規模出身の生徒にも相関関係が認められたことから、生徒がストレスによって生じた感情の制御を学ぶことと、個々の課題意識や目的意識を高めることが互いに正の影響を及ぼすということが示唆された。

「被信頼・受容感」に対しても、どの学校規模出身の生徒にも相関関係が認められたことから、他の生徒や教師から受容されているという感覚を高めることと、生徒がストレスによって生じた感情を制御することとは、互いに正の影響を及ぼすということが考えられる。中でも、大規模中学校出身の生徒の相関関係が他の学校規模出身の生徒よりも強いため、生徒の受容感を高めることと、ストレスによって生じた感情を制御できるように学ばせることが、効果的であると考えられる。「劣等感の無さ」に対しては、小規模校出身の生徒に相関関係が認められたことから、ストレスによって生じた感情への制御について学ぶことが、生徒個々の劣等感の軽減に効果があり、結果として学校への適応感を高めていくことが示唆された。

(3) 中学校 3 年生、高等学校 1 年生の比較について

中学校 3 年生では、学校への適応感尺度の 3 因子、コーピング尺度の 2 因子において、中規模校の生徒の数値が有意に高かったのに対し、高等学校 1 年生では、両尺度とも出身校の規模の違いによる有意な差は見られなかった。

学校への適応感尺度とコーピング尺度の相関関係については、相関の強さに若干の違いが見られたものの、両尺度の因子間の相関関係は、中学校 3 年生、高等学校 1 年生ともに概ね同様であった。このことから、クラス数が類似した中学校の生徒とその出身者においては、学校の規模によるある程度の共通した傾向が見られた。

IV 研究のまとめ

本研究では、中学校 3 年生と高等学校 1 年生の学校適応感やストレスコーピングを測定し、学校規模の違い（高等学校 1 年生については出身中学校の規模の違い）による差があるのかを検討した。その結果、高等学校 1 年生においては、学校への適応感尺度、コーピング尺度ともに出身中学校の規模の違いによる有意な差は見られなかった。

一方で、中学校 3 年生においては、学校への適応感尺度の「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」

「被信頼・受容感」の3因子、コーピング尺度の「問題焦点型」「情動焦点型」の2因子で、中規模校（学年2～3クラス）の生徒の数値が有意に高いことが認められた。このことから、学校規模によって中学校3年生の学校適応感やストレスコーピングに差があるということが明らかになり、学校規模に応じた支援が有効となると考えられる。

V 本研究における課題

本研究では、中学校3年生の学校適応感やストレスコーピングについて、中規模校の生徒の平均値が有意に高いことが検証された。その要因としては、クラス替え等による人間関係の変化の経験の有無や、クラス対抗行事の経験の有無などが考えられるが、本研究ではそれらを特定するには至っていない。今後はその要因を検証し、今回得られたデータに基づく相関関係の違いに着目することで、より効果的な支援を工夫することができると考えられる。

<引用文献・URL>

- 1 文部科学省 2017 「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」
- 2 青森県教育委員会 2015 「高校教員に対する中途退学者等の状況に関する調査結果」【概要版】
- 3 大久保智生 2005 「青年への学校への適応感とその規定要因 —青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—」 『教育心理学研究 第53巻 第3号』
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjep1953/53/3/53_307/_article/-char/ja/ (2019. 1. 22)
- 4 永作稔・新井邦二郎 2005 「自立的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討」 『教育心理学研究 第53巻 第4号』
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjep1953/53/4/53_516/_article/-char/ja/ (2019. 1. 22)

<参考文献・URL>

- 1 浅川潔司・尾崎高弘・古川雅文 2003 「中学校新入生の学校適応に関する学校心理学的研究」 『兵庫教育大学 研究紀要 第23巻』
<http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/bitstream/10132/863/1/AA115242460230009.pdf> (2019. 1. 22)
- 2 新井肇・古河真紀子・浅川潔司 2009 「高校生の学校生活適応感に関する学校心理学的研究」 『兵庫教育大学 研究紀要 第34巻』
<http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/bitstream/10132/2539/1/AA119847890340006.pdf> (2019. 1. 22)
- 3 大川尚子・井澤昌子・鍵岡正俊・佐藤秀子・森川英子・井岡郁晴 2008 「離島における小規模校の児童生徒のストレス状態」 『関西女子短期大学研究紀要 第18号』
- 4 粕谷貴志・大谷哲弘 2016 「高校生の内的作業モデルと入学時の学校適応」 『奈良教育大学紀要 第65巻 第1号』
https://nara-edu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=10944&item_no=1&page_id=13&block_id=21 (2019. 1. 22)
- 5 国立教育政策研究所 2017 「高校中退調査 報告書」
- 6 国立教育政策研究所 2002 「学級規模に関する調査研究」
- 7 南雅則・浅川潔司・新見直子・古川雅文・三木麻里子 2013 「高校生活に対する予期不安と高校生の学校適応感・キャリア意識に関する研究 —高校入学初期段階に焦点をあてて—」 『キャリア教育研究 第32巻 第1号』
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssce/32/1/32_KJ00008919162/_article/-char/ja/ (2019. 1. 22)
- 8 渡邊タミ子・高田谷久美子・海老原友美・川村留美・大島智恵 2009 「中学生の抑うつ状態におけるコーピングとソーシャルサポートに関する研究 —市部と郡部の比較—」 『山梨大学看護学会誌 第8巻 第1号』
<https://ci.nii.ac.jp/naid/110007357746/> (2019. 1. 22)